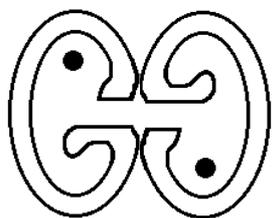


日本双生児研究学会ニュースレター



《第33号》

Newsletter of Japan Society for Twin Studies

2003年6月発行

目次

| | | |
|---|-------|----|
| 日本双生児研究学会第18回学術講演会のご案内 | | 2 |
| 最近の東大附属の双生児研究について (2003年5月24日, 第17回双生児研究会での講演記録) | 村石 幸正 | 4 |
| 多胎の子育て支援ワークショップ (2003年1月25日, 日本双生児研究学会第17回学術講演会ワークショップ) | 天羽 幸子 | 8 |
| コロラド便り その1 | 安藤 寿康 | 10 |
| 平成15年度日本双生児研究学会総会議事録・第1回、第2回幹事会議事録 | | 13 |
| 次回研究会のお知らせ (日時: 2003年11月15日, 13:30~ 場所: 慶應義塾大学三田キャンパス 講師: 横山美江氏) | | 14 |
| 平成14年度会計報告・平成15年度予算案 | | 15 |
| 国際双生児研究学会 (ICTS) のお知らせ | | 15 |
| 事務局から (幹事選挙について) | | 16 |
| 編集後記 | | 16 |

会員募集のお知らせ

入会を希望される方は郵便振替用紙に口座番号(00190-7-185311)、加入者名(日本双生児研究学会)をご記入の上、年会費(3,000円)をご送金下さい。また、通信欄に所属・所属の住所・電話番号・FAX番号・E-mail等をお書き添え下さい。

〒108-8345 東京都港区三田2-15-45
慶應義塾大学文学部安藤研究室内
日本双生児研究学会事務局
電話: 03-3453-4511 [内線23109]
FAX: 03-5427-1578
E-mail: juko@msa.biglobe.ne.jp

日本双生児研究学会 第18回学術講演会のご案内

日時：平成16年1月24日（土） 午前10時～午後5時

会場：東京国際大学早稲田サテライト 大学院臨床心理学研究科5階ホール

〒169-0051 東京都新宿区西早稲田 2-6-1
(電話) 03-3205-7727 (FAX) 03-3208-7264

1. 講演（1） 司会 天羽幸子
詫摩武俊（東京国際大学）
「カイザー・ウィルヘルム人類学・人類遺伝学・優生学研究所と高木正孝」（仮題）
講演（2） 司会 大木秀一
安藤寿康（慶應義塾大学）
「いま双生児研究から何がわかるか
ーヒトゲノム時代の行動遺伝学研究について考える」（仮題）
 2. シンポジウム 座長 天羽幸子
「一卵性双生児にみられる差異について」（仮題）
菅原ますみ、大木秀一、他
 3. 一般演題
 4. 多胎児育児支援関係 報告・提案（ワークショップ開催の予定）
- ほかに総会・懇親会

演題・報告募集

【抄録】

演題名、発表者名、全員の所属および発表要旨をA4 1枚(600~1000字程度)にまとめて郵便でお送りください。そのままコピーします。メールは次のところにお送りください。
sugiura@hs.p.u-tokyo.ac.jp (ツインマザーズクラブ副会長 杉浦)
多数の学術的研究発表のご参加を期待しております。

【締め切り】

平成15年11月10日(月) (必着)

【送り先】

〒169-0051 東京都新宿区西早稲田 2-6-1
東京国際大学早稲田サテライト 双生児学会 詫摩武俊宛

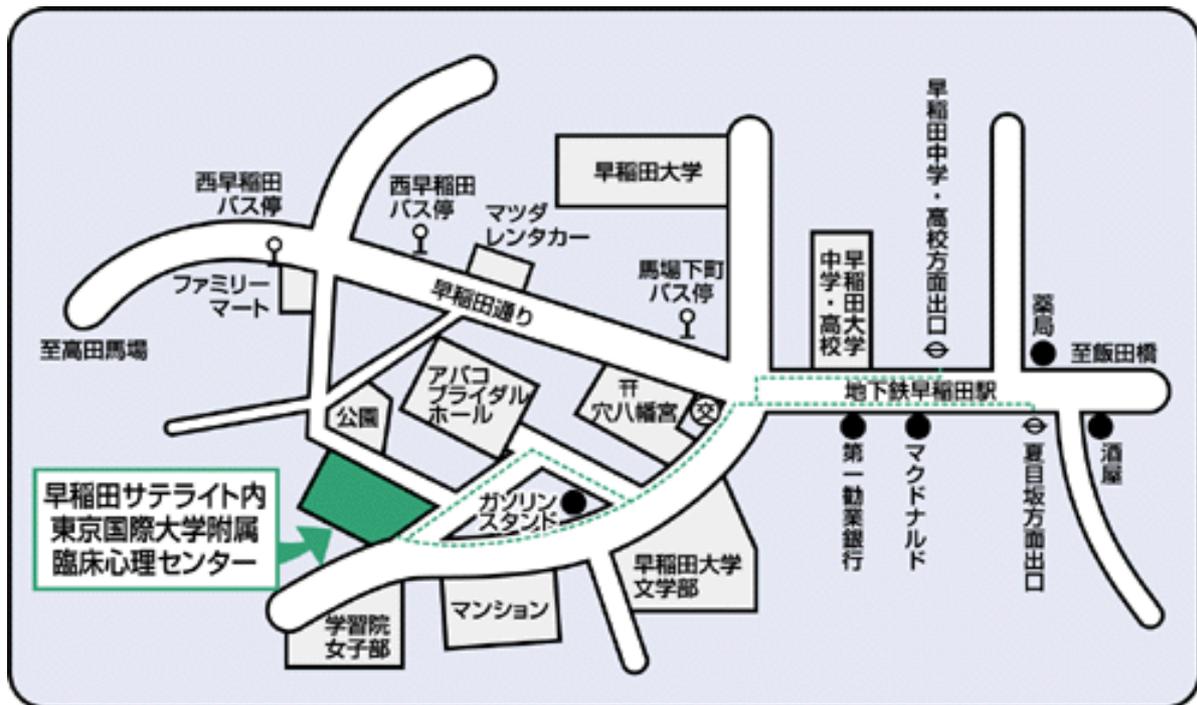
【お問い合わせ】

〒107-0062 東京都港区南青山 5-5-20
電話・FAX 03-3400-0838
天羽 幸子

【会費】

参加費 1000円（多胎児クラブ関係者は500円）
懇親会費 1000円

【会場案内図】



【交通のご案内】

*地下鉄東西線 早稲田駅下車 徒歩5分
(出口) 高田馬場寄り
(目標) 穴八幡宮

*都バス JR 高田馬場駅前より
早大正門行き乗車
「馬場下町」または「西早稲田」バス停下車 徒歩3分

*高田馬場駅より徒歩20分



最近の東大附属の双生児研究について

(第17回双生児研究会 2003年5月24日)

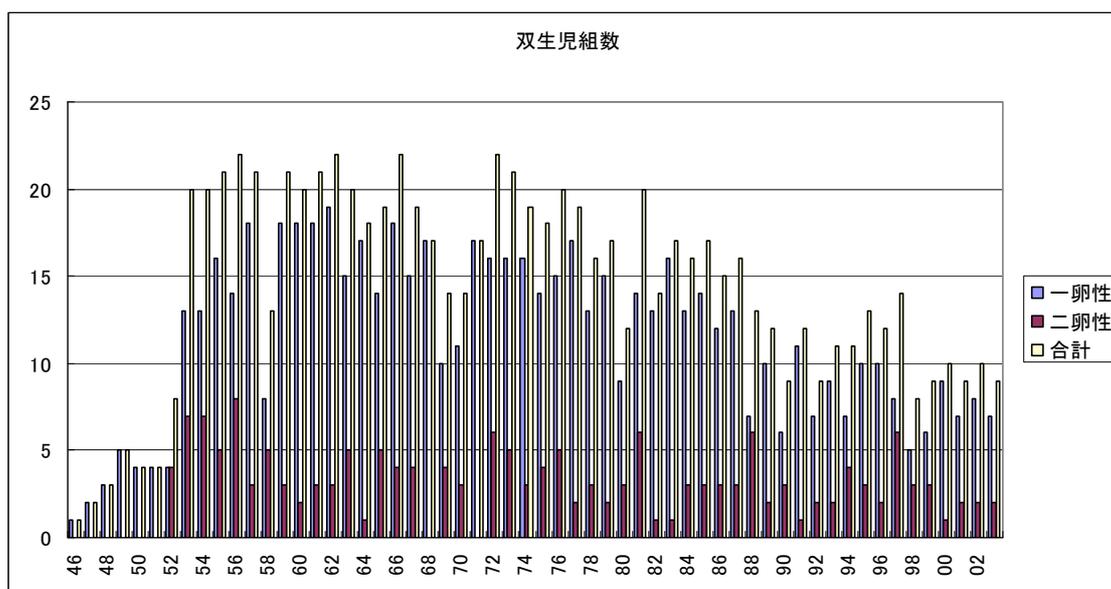
東京大学教育学部附属中等教育学校

村石 幸正

1. 東大附属の双生児

1.1. 双生児の入学者組数

東大附属には、1946（1回生）～2003（58回生）入学までで、一卵性双生児 665組、二卵性双生児 173組の合計 838組の双生児が入学してきた。



以前は各学年 20 組程度（あるいはそれ以上）在籍していたので、学年の 1/3 が双生児であり、学校全体（生徒数 720 名）では 250 名程度の双生児がいた時期もあった。しかし、現在、募集要項では双生児は 20 組までを募集するとうたっているが、入学者数は 10 組程度の入学者数にとどまってしまうっており、双生児の数が少なくなってしまう。

1.2. 双生児に対する考え方

現在の東大附属では、入学選抜時に卵性を問うことはしていない。また、三つ子以上の多胎児は入学させてこなかった。しかし、双生児は同じクラスに入れないという原則を考慮の上、2003 年度入学者選抜以降、双生児と三つ子までの募集というように変更した。

さらに、近年は双生児に対してだけ特別なこと（検査やアンケートなど）をしないようにしている。したがって、検査などは全生徒に行い、その結果は一般児のものと一緒にすべてのデータを現物として保存している。

2. 利き手調査 ¹⁾

2.1. はじめに

東大附属が、「中・高等学校」から「中等教育学校」に組織替えをしたことに伴い学校内のさまざまな変更の影響を受け、双生児研究担当組織である双生児研究委員会の活動が、

約2年間にわたり実質的に休止状態になってしまった。その背景には、附属の教員だけで、どのような双生児研究を行っていったらよいのかという閉塞感が漂っていたことも否定できない。

そのようなときに、東京大学大学院総合文化研究科（認知行動科学）の酒井邦嘉助教授が、双生児を用いた研究を求めて東大附属の校長に連絡を取ってこられ、2000年度から双生児研究委員会（毎週開かれている）に出席されるようになった。

酒井先生は、双生児研究委員会が何をしたらよいかと考えあぐねている現状をご覧になり、海外の双生児に関する研究をいくつか紹介して下さった。その中に、利き手に関する研究があった。

2.2. 利き手調査の概要と結果

日常、多くの双生児と接する機会が多い東京大学教育学部附属中等教育学校の中で双生児を観察していると、双生児には「右利きと左利きのペア」が多いように感じられる。一般に、子どもが左利きだとわかったとき、右利きに矯正されることが多いと考えられ、一般児（双生児ではない生徒）の左利きの生徒はそう多くない。それに対し、矯正される可能性が一般児と差があるとは思えない双生児には左利きが多いように感じられるのである。

そこで、2000年度の双生児研究委員会の活動の一つとして、Oldfield (1971)によるEdinburgh inventory²⁾の翻訳版を用いて、利き手に関するアンケート調査を行い、次のような結果を得た。

| | L.Q. ≥ 0 | L.Q. < 0 | 計 |
|--------|---------------|------------|-----|
| 一般児 | 513 | 42 | 555 |
| 一卵性双生児 | 76 | 10 | 86 |
| 二卵性双生児 | 30 | 0 | 30 |

L.Q.値が負の者を「左利き」と定義することになると、一般児における左利きの者の割合は、約7.6%であった。

N. Geschwind & W. Levitsky³⁾による研究でも、左利きの割合は約7%と報告されていて本研究での値とほぼ一致していた。

一卵性双生児の場合、両者とも左利きという組はなかった。そして、一卵性双生児の生徒の中で左利きの者の割合は、約12%であった。しかし、 χ^2 検定の結果、双生児には左利きが多く出現するということはいえないことがわかった。

以上の分析を通して、「双生児では（一卵・二卵を問わず）右利きと左利きの組が多い」という仮説は否定された。また、遺伝情報が違うだけで生育環境は同じと考えられる一卵性双生児と二卵性双生児に違いを見出すことができなかつたということは、利き手が遺伝子だけでは決まらないことを示唆している。すなわち、利き手は、個体の発生および成長の過程で、後生的かつ確率的な要因に依存して決定されるものだと考えられる。

ところで、一般児と双生児で左利きの出現の頻度に差がないとすれば、双生児のA児とB児両方が左利きとなる確率は、0.5% (0.076×0.076) 程度だと予想される。この頻度はA児とB児どちらかが左利きとなる確率である14% ($0.076 + 0.076$) と比べて非常に低い。また、A児とB児どちらかが左利きとなる確率である14%という数値は、一般児の左利きとなる確率(0.076)の2倍である。したがって、双生児には右利きと左利きのペアが多いように感じられる現象はこの数値の違いであり、双生児をペアとして注目するということからくる現象であったことがわかった。

3. 音感調査

3.1. はじめに

前出した利き手調査が、附属学校の教員の中にあつた「双生児には右利きと左利きのペアが多い」という印象を見事に解明してくれたため、その勢いを駆って、次の研究をやってみようと勢い込んだ。

以前から、慶應大学の安藤寿康先生から、遺伝と環境に関する研究は、いわゆる学力に関してのものはたくさんあるが、芸術・運動など学校で実技教科と呼ばれている領域に関しての研究科があまり無いので東大附属でやってみて欲しいと言われていたこともあり、前述の酒井先生が見つめてきてくださった音感テストをやってみようということにした。

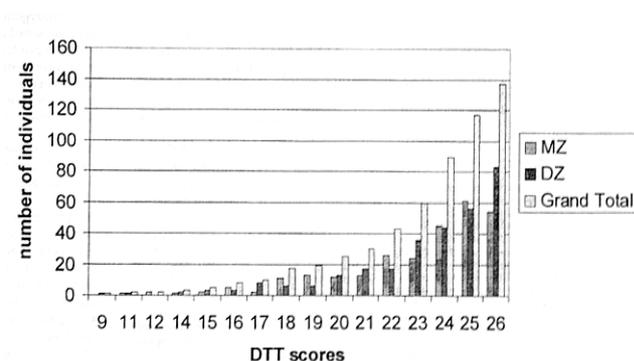
3.2. 音感調査の概要と結果

2001年度の双生児研究委員会の活動の一つとして、D. Drayna ほかによる音感調査⁴⁾をできるだけオリジナルに近い形で行ってみた。

オリジナルの調査は、(1) Turkey in the Straw, (2) Yankee Doodle, (3) Oh! Susanna, (4) The Star-Strangled Banner, (5) America the Beautiful, (6) Daisy, Daisy, (7) Clenenteine, (8) Fuer Elise, (9) Swing Low, Sweet Chariot, (10) The First Nowell, (11) Jolly Good Fellow, (12) Silent Night, (13) La Mardeillaise, (14) The Barrle Hymn of the Republic, (15) My Country Tis of Thee, (16) Silent Night, (17) Adestes Fideles, (18) London Bridge, (19) Auld Lang Syne, (20) Daisy, Daisy, (21) America the Beautiful, (22) La cucaracha, (23) Pop Goes the Weasel, (24) Aloha Oe!, (25) Auld Lang Syne, (26) Yankee Doodle という順で構成されている全 26 曲からなるテストである。

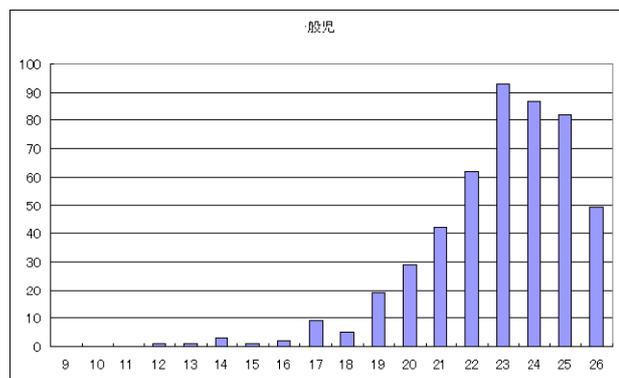
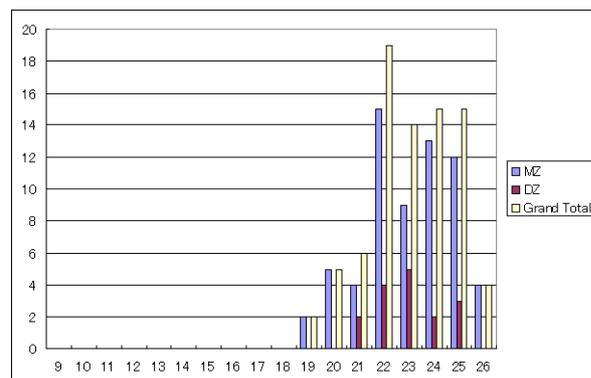
曲番号の 2,5,6,8,12,15,18,22,25 は、オリジナルのままの正しいものであるのに対し、その他の曲はいくつかの音符を半音あるいは 1 音だけ下げたり上げたりしてある。上記の 26 曲に同じ曲名があるのは、その 2 通りのものが存在していることを示す。

調査条件を同じにするために、調査に関する指示すべてと調査の曲をすべて含めた CD を作成し、H.R.の時間を利用して、担任に依頼して調査を行った。



オリジナル論文の結果のグラフが左図である。それに対し、東大附属で行った結果は、下図のようであった。

明らかに分布が異なっている。オリジナルでは正答数が 23 以下を tune deaf としているが、東大附属の結果では正答数 23 がピークとなってしまっているという具合である。



この結果に対する解釈として妥当なのは、やはりわれわれが作成した CD の曲がオリジナルとは違ったということなのではないかと考えている。

研究報告としては珍しいとは思いますが、先行研究に対する追試研究を行ったが、この研究は失敗に終わったと言わざるをえない。

4. 英語修得過程の調査

4.1. はじめに

2002 年度の双生児研究委員会の活動として、前述した酒井先生のオリジナル研究を双生児研究委員会との共同研究の形にさせていただいて行った。

4.2. 英語修得過程の調査の概要

<目的> 英語のヒアリング能力と文法運用能力の向上を促すトレーニングを授業時間に実施し、その習得過程を脳活動の変化としてとらえることで授業法の検討に役立てる。

<期待される成果> 授業法の教育効果を脳活動の変化として評価するという全く新しい調査法が提案できる。具体的には、第 2 言語習得において、文法規則の運用と「丸覚え」のどちらが効果的かを、成績の向上と脳活動の変化という両面から検討できる。

<対象> 1 年生のすべての生徒に対し、各クラスの授業時間中にトレーニングを実施する。また、双生児に対して、トレーニングの前後で MR I による調査を実施する。

<方法> マークシート・テストによる初期状態の確認、第 1 回 MR I 調査、トレーニング、マークシート・テストによる到達度確認、第 2 回 MR I 調査の順で行う。この調査では、英語の動詞の現在形と過去形の習得に焦点を絞る。

この研究はまだ正式に報告がなされていないため、この場での結果の報告は差し控えさせていただくが、機会があれば、改めて結果を報告させていただきたいと思っている。

以上、ここ数年の東大附属の双生児研究委員会の研究活動の概要を報告する次第である。今後とも、双生児の募集枠を設けている学校として、双生児研究を継続していければと考えている。

5. 参考文献

- 1) 村石幸正 ほか 2002 双生児の利き手について 東大附属論集, 44, 69-74.
- 2) R. C. Oldfield 1971 The assessment and analysis of handedness: The Edinburgh inventory. *Neuropsychologia*, 9, 97-113.
- 3) N. Geschwind & W. Levitsky 1968 Human Brain: Left-right asymmetries in temporal speech region. *Science*, 161, 186-187.
- 4) D. Drayna, A. Mnichaikul, M. de Lange, H. Snieder, T. Spector, 2001 Genetic Correlations of Musical Pitch Recognition in Humans, *SCIENCE*. 291, 1969-1972.



多胎の子育て支援ワークショップ

ツインマザーズクラブ 天羽幸子

今回このワークショップが一般の研究演題の発表の場で行われ、1時間半近くも時間をいただけることがわかったのが、開催日の2週間前であったため話題提供者を準備することは無理かと思われた。しかし私の突然のお願いに北は青森、西は下関からかけつけて協力いただき、学会に参加しているすべての研究者の前でお母さんたちの生の声が伝えられたことは本当に嬉しく思っている。

(司会 杉浦祐子)

1. 現在の行政としての対応 (天羽幸子)

厚生労働省はこれまで、子育てと仕事の両立支援の観点から、特に保育に関する施策を中心にしてきた。しかし子育てをする家庭の視点からみた場合、より全体として均衡のとれた取組みとして2002年9月以降「少子化対策プラスワン」として次の4点を強化している。

- ① 男性を含めた働き方の見直し
- ② 地域における子育て支援
- ③ 社会保障における次世代支援
- ④ 子どもの社会性の向上や自立の促進である。

文部科学省では「社会の宝」として子どもを育てようというスローガンのもと、子育ては親だけが担うものでなく、社会全体として取り組もうということで「地域としての子育て支援」に力を入れるようになった。

私たちとしては「地域の子育て支援」の中に「多胎児の子育て支援」がどの程度見直されてくるのか、この機会に声を大にしていきたいと考えている。

2. 青森・ツインドリーム (佐野みゆき)

平成6年からの活動を述べ、公的支援を平等に受けられず、リーダーとしての経済的負担も大きい、妊娠中からの支援を行いたい。

3. 下関・ツインズファミリー (大田和子)

事務局は子育て支援センターにおくことができ、集会には育児ボランティアの組織を利用することができる。会場確保や公的補助もありリーダーも3年間で交代する。サークルの活動としては順調で組織的にも恵まれているが、会員の傾向としては楽しいことは参加したいが責任あることはしたくないという方向がみられるので、少し心配している。

4. 埼玉・ツインキッズ (久保田奈々子)

埼玉県を中心に活動して12年目である。平成5年ごろから保健所が多胎児の育児を支援するところも出てきた。しかしリーダーをさがして多胎児サークルを立ち上げるだけの場合もあるので、今後は多胎児育児教室を継続し、サークル活動には会場の提供や育児の悩みについての専門的知識の対応などがほしいと思っている。

5. ツインマザーズクラブ（横内まき子）

昨年度の多胎児育児支援のミニサークルの調査では発足して5年も過ぎると、活動の継続に不安をかかえているところも多いことがわかった。ツインマザーズクラブが35年以上活動を継続している工夫として、

- ① ボランティア活動の精神を次世代につなげるために、集会では成長したふたご自身の中学生・高校生がベビーシッターとして参加するようになったこと。
- ② 子育ての終わった母親たちがサポートグループとして、地区集会に出席して育児のなやみなどに対応していること。
- ③ 当日会場でも配布したが「五歳からのふたごの育児」という、少し年長になったふたご育児についての項目別に（例えば入園、入学には。平等な扱いとは）パンフレットを作って地区活動への話題提供や話しあいのひろがりをはたしている等、活動を継続する工夫を発表した。

6. ツインマザーズクラブ・手をつなぐネットワーク（畑中恵子）

ツインマザーズクラブのグループのひとつとして、多胎児の中で障害をかかえる子どもを持つグループの代表者として、三歳を過ぎて楽にならないこのような子どもたちの育児をどのように支えていったらよいだろうか。障害は個々別々であるが、それぞれの要求にあうような支援をさがし、ネットワークの仲間に伝えていきたい。（ツインマザーズクラブでは多くの会員がこのネットワークの活動を支援している）

7. 京都大学医療技術短期大学部（横山美江）

三胎児や障害をもつ多胎児の調査から、公的機関などに多胎児についての正確な情報の不足がみられるので、保健師の教育課程の中にきちんとしたシステム作りを急ぎたい。

8. 尼崎市保健所（大岸弘子）

尼崎市保健所で12年前、はじめて双子母親学級をひらき、その後もずっと予算をとり継続している。今、保健所は全国的に人員、施設などが統合され、このような母親学級の予算も削減される方向にある。母親学級の必要性を利用する多胎児の母親からこまめに要望しつづけることも必要である。

9. ビネバル出版（田中輝子）

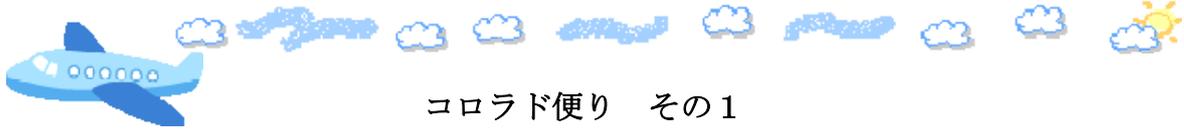
10年ほど続いた季刊紙「ツイズ」が休刊になることになったが、多胎児育児支援の活動は続けていきたいと思うので、NPOの形をとりたいと考えている。

10. 大阪府立母子保健総合医療センター（末原則幸）

年間約百組の多胎児の出産がある医療センターとして、妊娠中からのフォローが医学的な側面からも重要視されている。（一般発表の中でも多胎レジストリー（案）を確立し、ハイリスクな多胎児出産に周産期医療資源の効率的運用などについて言及された）

短い準備期間であったにも拘らず、会場からの発言も多く、充実したワークショップができて、心から嬉しく思っている。保健センターなどの公的支援をどのようにしたら、地方のサークル活動の発展に結びつけることができるか、会報をだし、地区集会を開く形の支援活動をこれから先も元気に継続させるにはどのようにしたらよいか。多くの課題はあるが、会場で参加した研究者たちにも十分理解していただけたのではないかと考えている。





コロラド便り その1

安藤寿康 (慶應義塾大学)

双子と行動遺伝学の研究を進めるために、大学から1年の研究留学の機会を得て、いまアメリカ、コロラド大学のボウルダー校にある行動遺伝学研究所(Institute for Behavioral Genetics; IBG)に滞在しています。思い返すと、昔のニューズレターに、ここに初めて訪れたときのエッセイを寄せたことがありました。1992年秋のことです。あれが自分にとって初めてのアメリカ訪問でした。カリフォルニア、コロラド、ミネソタ、ニューヨークと大陸を横断し、そのなかでもこのコロラドの美しい自然、当時の所長だったディフリース J.C.DeFries 博士の温かいもてなしに、もしいつか留学する機会があったら絶対コロラドと思っていたのですが、それが10年後にして実現したわけです。所長はディフリースさんからヒューイット J.K.Hewitt さんに代わりましたが、そのおかげでもとの所長室から建物の奥の山並みの見通せる部屋に移られたディフリースさんの研究室のすぐ隣に、私の研究室を用意してもらいました。

私がボウルダーの行動遺伝学研究所を留学先に決めたのは、もちろんロッキー山脈の美しさだけが目当てではありません。何よりもここが行動遺伝学のメッカだからです。1967年にマクレーン G.E.McCleary が中心となり、研究大学としての変身をめざしていたコロラド大学心理学部にいち早く行動遺伝学研究所を設立して以来、ヴァンデンバーグ S.G.Vandenberg、ディフリース、ファルカー D.W.Fulker、プロミン R.Plomin、ブームスマ B.I. Boomsma など、行動遺伝学関連の文献を飾る人々がここで研究を行い、数々の業績を上げつづけてきました。とくにコロラド養子研究 Colorado Adoption Project は1975年から続く大規模な養子研究で、つい最近この研究の成果をまとめた第4冊目の本(“Nature, Nurture, and the Transition to Early Adolescence” Oxford University Press; ISBN: 0195157478)が出版されたばかりです。また読字障害、数学障害など認知障害の双生児研究でも画期的な研究が進められ、認知能力に関する遺伝子の特定の領



行動遺伝学研究所 (IBG)

域でも最先端の研究を行っています。ディフリースさんとファルカーさんの名を冠した D.F extreme analysis は、認知障害などの遺伝のメカニズムの解明や遺伝子の発見をする有効な方法として注目されています。ここにいれば、こうした最先端の動きがすぐキャッチでき、研究の方法論なども効率よく学べるだろうというのが、ここを選んだ第一の理由でした。実際、こちらに来て一月くらいしてから、数学障害の双生児データをいじらせてもらえることになり、いまはこのデータに詳しいサリー・ワズワース S.Wadsworth さんの助けを借りて、プログラミングなどの勉強をしながら、これと日本でのわれわれ自身のデータとを比較するような研究にとりかかっています。

ボウルダーは 1992 年以来、「双生児と家族研究のための国際ワークショップ」の参加をはじめ数回訪れていたの、ディフリースさんはじめとして、顔なじみの人が多く、土地勘があるというのもここを選んだもう一つの理由の一つです。なにしろ 40 歳も半ばにしての初めての留学経験で、どうせ若い頃ほど適応力などないに決まっているので、とにかく海外生活に順応するのにかかる時間を最低限にしたい、そのためにはなるべく知っている土地がいいと思ったわけです。ですから去年の夏に学会などの機会を利用して 2 回訪れて、住む家を決め、また日本での生活スタイルをできるかぎり大きく変えなくてすむよう、好きな食材や趣味の音楽 CD など、自分の生活の重要アイテムは出発前から早々リストアップして船便で送りました(研究のための本を送ることよりこっちの方が真剣だったかも)。また英語力もある程度つけておこうと、若い人たちに混じって TOEFL や TOEIC を目標点目指して毎月のように受けたりして、われながら万全の準備をしたつもりでした。それでもこちらへ来て初めのうちは、大は車を買うことから、小はやれ輪ゴムやセロテープがないとスーパーに走り、夜明けに突然おそわれた雨のような水漏れに驚いて、電話口で "Help me!" と叫んで消防士を呼ぶなど、生活が安定するのに一月ほどかかりましたが。



ここを選んださらにもう一つの理由は、ここでは行動遺伝学の正式の授業があり、基礎から勉強し直せると考えたことです。自分にとって行動遺伝学はほとんどすべて独学でした。この領域は心理学、遺伝学、統計学のすべての領域にわたるそれぞれの最先端の知識が要求され、それらをバランスよく統合して、どこかでオリジナリティを出さねばなりません。文学部育ちの私にとっては、心理学はともかく、遺伝学とそれに関連する統計学については、自分でもあちこちに知識の穴があることに気づきながら、ここまで来ていました。こちらに来てからは、学部の行動遺伝学の入門コースと、大学院のクラスを二つ履修しました。学部の入門コースはさすがに初歩すぎると思いましたが、自分の知っていることを英語で聞くのはいいリスニングの練習になりましたし、毎回やはり何か新しい発見がありました。

何より有益なのは大学院でのディフリースさんの「量的遺伝学」のクラスとヒューイドさんの文献講読です。いずれも院生 5 人の同じメンツによるアットホームな雰囲気でした。大御所ディフリースさんは、量的遺伝モデルの基礎の基礎から、あらゆるステップを抜かすことなく明快に理路整然と展開し、少し進んでは "So far, so good?" と確認しながら進めてくれる授業で、こんな大先生が学生相手にまるで中学生の数学の授業のように、簡単な式の展開まで毎回毎回ていねいに黒板で示してくれることに驚きました。しかしそれによって、行動遺伝学の基礎理論が、メンデル遺伝学や心理測定学、そして新しい時代の分子生物学のモデルともしっかりと整合性をもつことを改めて実感を持って理解できました。日本の心理学者もこういう教育を受ければ、もっと素直に行動遺伝学を受け止められるだろうに、と思わざるを得ません。

ヒューイドさんの文献講読は、行動遺伝学史上の重要な論文の講読で、毎回一つか二つずつの論文を読んできて、院生がそれを発表し、それをめぐってディスカッションをするという形式

のもので。これも驚いたのは、初回がメンデル G.Mendel とワトソン・クリック J. D. Watson & F. H. C. Crick のオリジナル論文でした。恥ずかしながら、遺伝学の超基本中の基本であるこの二つの論文は、あまりにも基本なのでどんな本にも紹介されているものであるがゆえに、逆にこれまでそのオリジナルを手にして読んだことはありませんでした。そのあとの論文の多くは、QTL(量的遺伝子座)を探すテクニックに結びつく内容のもので、行動遺伝学が確実に分子生物学と融合しようとしていることがわかります。私もこのコースの最後に、カスピ A.Caspi とモフィット T.E.Moffitt らが昨年の *Science* 誌に載せた MAOA 遺伝子多型と反社会的行動の関係に及ぼす家庭環境との交互作用についての論文を発表させてもらいました。

今年の1月末にこちらに来てから、アメリカの対イラク戦争という、一人の人間として看過できない大きな出来事に出会い、それはそれで重要な意味がありましたが、研究に関連する最も重要なニュースは、やはりヒトゲノムの解読終了宣言でしょう。もちろん解読にはいろいろなレベルがあるので、これで終わりということはありませんが、時代は確実に人間の遺伝子の理解のあり方をめぐってさまざまな問題が提起される時代に突入しました。この時代、少なくとも行動遺伝学としての双生児研究は、双生児研究だけで成り立つ時代ではなく、分子生物学はじめ生命科学の諸領域との結びつきを常に意識しなければならなくなりました。と同時に、いま世界のあちこちでさまざまな研究者があらためて双生児研究の意義を再確認して、これまで関心のなかった研究者までが参入するようになってきていることからわかるように、この生命科学の大転換期に、双生児研究は新たな意義を持って注目されるようになることもまた確実だと思います。このような時代に、日本の双生児研究がどのようなビジョンを持っていま何を始める必要があるのか、それを見極めることがこの留学の最大の目標です。



ディフリースご夫妻と

平成15年度 日本双生児研究学会 第1回幹事会議事録

日時： 平成15年度（2003年）1月25日（土） 12:00-13:00

場所： 大阪市立総合医療センター さくらホール

出席者： 浅香昭雄、天羽幸子、今泉洋子、大木秀一、小野寺勉、加藤則子、末原則幸、杉浦祐子、野中浩一、早川和生、吉田啓治（幹事）、飯島純夫（監事）、鎌倉利光、石川久美子（事務局代理）

議題：

1. 平成14年度（2002年度）の活動報告

- 1) 第16回学術講演会について
- 2) 第15回研究会、第16回研究会について
- 3) ニュースレターについて（第31号・第32号の刊行）
- 4) 会員状況報告

会員状況について、学会費の納入状況を整理し、5年以上滞納している会員に対しては、何らかの処置（退会などを含めて）を行うべきではないか。今年度の会費を早めに納入してもらえよう諸会員に伝えていくことが必要。

2. 平成14年度（2002年度）決算・会計監査報告

3. 平成15年度（2003年度）予算検討・承認

4. 平成15年度（2003年度）活動計画

1) 第18回学術講演会について

東京国際大学（詫摩武俊大会会長）で開催予定。

2) 研究会について

第1回 2003年度5月24日(土) 13時30分～16時

場所：東京大学医学部教育研究棟

講師：村石幸正先生（東京大学教育学部附属中等教育学校）

演題（予定）：「双生児を用いた音感テストの結果から」または

「第二言語獲得に関する脳のはたらき ～双生児のデータを用いて～」

学会事務局からプロジェクターを持参する。

第2回 日程は未定。

場所：慶應義塾大学三田キャンパス大学院棟（予定）

講師：横山先生（予定）

3) ニュースレターについて（第33号、第34号）

今年度は、6月、12月に配布予定。できるだけ年内に期日を守って配布する。

5. 平成16年度学術講演会開催地について

志村先生（金沢大学）に依頼する予定。

6. 新会長（2003-2004）について

幹事会より推薦された今泉洋子氏（兵庫大学健康科学部教授）が新会長に就任することが承認された。

7. その他

今年度、役員選挙を行う。選挙管理委員会を発足する。

平成15年度 日本双生児研究学会 総会 議事録

日時： 平成15年度（2003年）1月25日（土） 13:00-13:15

場所： 大阪市立総合医療センター さくらホール

幹事会議事録にある内容と同様。

今泉会長から、学会長を2年担当することが報告された。



平成15年度 日本双生児研究学会 第2回幹事会議事録

日時： 平成15年度（2003年）5月24日（土） 16:00-17:30
場所： 東京大学医学部教育研究棟13階1304教室
出席者： 浅香昭雄、天羽幸子、今泉洋子、大木秀一、小野寺勉、加藤則子、
杉浦祐子、野中浩一、吉田啓治（幹事）、村石幸正（監事）、
詫摩武俊（大会会長）、鎌倉利光（事務局代理）
欠席者： 安藤寿康、岡崎祐士、末原則幸、早川和生、又吉國雄

議題：

1. 次期の第18回学術講演会について
詫摩大会会長から準備状況の説明が行われた。
 - ・ 日時は平成16年1月24日
 - ・ 場所は東京国際大学早稲田サテライト 大学院臨床心理学研究科5階ホール
 - ・ 講演・シンポジウム・一般演題・ワークショップを行う予定。
 - ・ 一般演題の抄録については平成15年11月10日を必着とする。
 - ・ 参加費について、多胎児クラブは500円に変更する。
2. 6月のニュースレター原稿について
大木幹事から説明が行われた。
3. 第18回（2003年度第2回）研究会講師の件（横山美江会員）
演題：「多胎児家庭に生じやすい問題と支援の必要性について」
日時：11月15日（土）（13:30～）に決定。場所は慶應義塾大学（三田校舎）。
4. 学会会員について
現在、学会会員は160名程度である。
学会費の滞納が3年間以上になれば、自動的に退会になることを確認した。
5. 幹事の選挙について
 - ・ 選挙権については、規約に従うこと（会員になってから半年間、学会費の滞納が3年間以内であること）。
 - ・ 幹事の選挙の期限は、11月10日を必着にする予定。選挙の開票の日時は11月15日（第2回研究会；慶應義塾大学）にて、研究会が行われる前に開票する予定（立会人は今泉、野中、大木幹事、事務局代理・鎌倉会員）である。
6. その他
 - ・ 天羽幹事から学術講演会に関するマニュアルが配布された。
 - ・ 名誉会員の規約について
規約の検討は浅香、今泉、大木、安藤幹事が行う。
 - ・ 2004年第1回の研究会（第19回）の講師は又吉会員に依頼する予定。

次回研究会のお知らせ

2003年 11月15日（土）13:30～
慶應義塾大学三田キャンパス

横山美江氏（京都大学医療技術短期大学部）

「多胎児家庭に生じやすい問題と支援の必要性について」

日本双生児研究学会 平成14年度(2002.1.1～2002.12.31) 会計収支報告

| 収入 | | 支出 | |
|------------|-----------|--------------|-----------|
| 費目 | 金額 | 費目 | 金額 |
| 前年度繰り越し | 1,642,977 | 研究会謝礼 | 20,000 |
| 会費納入 | 337,000 | 事務・消耗品費、会議費 | 34,970 |
| 平成11年度分 3 | 9,000 | ニュースレター編集費 | 50,000 |
| 平成12年度分 9 | 27,000 | 事務局人件費 | 56,000 |
| 平成13年度分 17 | 51,000 | 通信費 | 47,960 |
| 平成14年度分 70 | 217,000 | 第17回大会開催費補助費 | 100,000 |
| 平成15年度分 4 | 12,000 | | |
| 平成16年度分 1 | 3,000 | 支出合計 | 308,930 |
| 年度不明分 6 | 18,000 | | |
| その他(利子) | 308 | 次年度繰り越し金 | 1,671,355 |
| 合計 | 1,980,285 | 合計 | 1,980,285 |

日本双生児研究学会 平成15年度(2003.1.1～2003.12.31) 予算案

| 収入 | | 支出 | |
|-----------------------|-----------|--------------|-----------|
| 費目 | 金額 | 費目 | 金額 |
| 前年度繰り越し | 1,671,355 | 研究会謝礼・交通費 | 50,000 |
| 会費収入 | 375,000 | 事務・消耗品費 | 20,000 |
| 105人(=150×0.7)×¥3,000 | | 会議費 | 30,000 |
| 過年度分(20×¥3,000) | | ニュースレター編集費 | 50,000 |
| その他(利子) | 300 | 事務局人件費 | 60,000 |
| | | 通信費 | 90,000 |
| | | 第18回大会開催費補助費 | 100,000 |
| | | 支出合計 | 400,000 |
| | | 次年度繰り越し金 | 1,646,655 |
| 合計 | 2,046,655 | 合計 | 2,046,655 |



第11回国際双生児研究学会(ICTS)開催のお知らせ

日時：2004年 7月 2-4日

場所：サザンデンマーク大学，オデンセ（デンマーク）

☆さらなる情報と登録に関しては下記アドレスのHPをご参照の上、
ふるってご参加下さい。

11th International Congress on Twin Studies
2 – 4 July 2004
Odense – the city of H. C. Andersen, Denmark

<http://www.icts2004.sdu.dk>

事務局から

日本双生児研究学会

2004～2006年 幹事選挙を 今年の秋に行います。

選挙名簿作成のため、所属・連絡先・メールアドレス
などの変更がありましたら事務局にお知らせ下さい。

編集後記

◆ 天羽先生が大阪の学会（第 17 回学術講演会）の時の「子育て支援ワークショップ」の内容につき、本ニュースレターでご報告下さいました。多胎児の子育て支援の NPO が立ち上がったことも印象的でした。筆者は、定年退職したら公務員のしぼりのない自由な活動をしてみたいものだと思ふと考えることがあるだけに、いろいろな活動が組織化されてゆく様子は大変興味深いです。

安藤先生がコロラドからお便り下さっています。ポストゲノムの時代が模索されているわけですが、双生児研究もその中で重要な存在になって来るのだということが理解できました。優秀な研究者たちの活躍に期待します。



（加藤則子 kato@niph.go.jp）

◆ 最近、世界中の双生児レジスターについて調査する機会がありました。著名な北欧、オーストラリア、ミネソタなど以外にも population-based とよべる双生児登録が 30 近くあり、アジア諸国でも精力的にレジスター作りが進められています。今回特別にご寄稿いただきました安藤先生の留学先であるコロラドも双生児研究のメッカのひとつです。日本では双生児レジスターに限らず研究上のレジスター作りには潜在的な拒否反応があるように思えます。もちろん研究のための研究と言うのはこの時代言語道断だと思います。この話を双生児関係とは縁もゆかりも無い法律家の知人に話したところ、「プライバシーと公共の利益に対する考え方の歴史の違いでは」と言うようなコメントを頂きました。各国の法体系の歴史的な詳細は当然理解できなかったのですが、上の一言に妙に納得しました。



（大木秀一 sooki@kj8.so-net.ne.jp）

ニュースレター

日本双生児研究学会 発行

編集：ニュースレター編集委員会（責任者：加藤則子・大木秀一）